國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕楠原彰著『野の詩人 真壁仁 その表現と生活と実践と』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 加藤, 種男, Kato, Taneo
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000644

〔書評〕

楠原彰著『野の詩人　真壁仁　その表現と生活と実践と』

加藤種男

その昔、松永伍一によって、ぼくたちは農民詩人、真壁仁の存在を知った。松永の仕事は多岐にわたるが、何よりも大きな業績は、全五巻にもわたる『日本農民詩史』を書いていて、膨大な詩史が描けるほどにも農民詩の世界が豊であることを知らしめたことであった。

しかし、一方で、真壁仁の名に触れたときに、ああ、農民詩人の真壁仁だな、と了解して安心してしまうということがある。自分の怠慢を松永伍一のせいにするのではないが、ぼくたちは、人一人の人生をたった一つの肩書で理解して、めったにその先に進もうとしない。ちなみに、Wikipediaの紹介では、真壁仁は「日本の詩人、思想家」である。

けれども、こうした肩書だけに納まってしまうのでないことを、楠原彰は本書の冒頭で示唆している。「真壁仁は、詩人・思想家であると同時に、平和運動家、文化・教育運動の実践者であった。そして、何よりも農民であった。〈農の精神〉を生きた生活者であった」と。

これでも真壁仁が何者だったかを伝えるにはあまりにも不足している。それは、誰よりも著者楠原彰がそう感じたからこそ、この大部の評伝を書いたのである。

どうして人はその人の肩書だけで人を語ろうとするのか。履歴書風の人物紹介で人を理解して済ませる他者認識は、ついに実際の人物を知ることなく、貨幣換算できる機能の一部を交換するだけで、相互理解にほど遠い。現代人の生活から個別固有の具体的な細部が失われ、その結果、全人的人格の表現者としてではなく、現代人は細分された交換可能な抽象的人格を生きている。その回復を願って本書は書かれている。

真壁仁は、宮沢賢治に深く共感していた。どこに共感したか。宮沢賢治の「何ものにもとらわれない」表現者としての豊かさに注目すると同時に、賢治がとりわけ生活者、科学者、技術者、農業指導者、宗教家、教育者といった「全人的人格の表現者であった」ことに大きな意味を見出し共感した。

真壁仁は農民にして詩人という、今流行りの「半農半芸」ど

ころではなかった。半農半芸とは、芸術活動もするが、それ以外の様々な仕事もする市民芸術活動の再評価のために、今日のアートプロジェクトの世界で浮上してきている概念である。人は実にトータルに生きる。真壁は賢治にならって、信仰と生活と、そして芸術をもっと広く捉えなおそうとした。まさに真壁仁もまた「全人的人格の表現者」だった。

その幅の広さは、こういうところにも及んでいる。東北学を提唱し、現代の民俗学を代表する赤坂憲雄をして『真壁仁研究』全七号の刊行に踏み切らせたほどの影響力をもった。真壁仁を、民俗学者、地域史研究家と称してもいいはずであろう。そして、この面での真壁の大きな業績である『手職』に結実した研究で、真壁が訪ね歩いた職人の数を、総勢八〇人と楠原は紹介している。「和菓子、絵蝋燭、畳職、鮨匠、紅花づくり、塗師」などであるが、普通ならば、今したように五六の事例を挙げて、以下省略すべきところを、本書の興味深い点の一つは、八〇人すべてを書き写していることである。学者の仕事だなあ、とぼくなどは感嘆する。しかし、この「具体的で固有な」手仕事こそが、地域の生活者にして表現者である「野の詩人」の何よりの証であって、一つも漏らすことはできないのだ。

真壁仁の生活と仕事は本当に幅が広い。黒川能に出会い、これまた深く共感して、これを世に送り出すのに尽力した。黒川能とは何か。山形県黒川の農民が、「何百年にもわたって創造してきた、驚くほど神々しく美しい民衆芸術」である。それは、真壁によれば「室町の大和猿楽の芸道が雪深い東北の一山村」に伝えられて、「農民生活を光彩づける民俗的な祭典」である。

黒川能について、真壁は「信仰と芸術と生活」の完全な一致であって、神と共にあるがゆえに支配者を必要とせず、また「観客を必要としない」といっている。

この考え方は、ぼくたちを勇気づける。黒川能に代表される民衆的祝祭的芸能は、共同体の中で、信仰と生活を同じくする人々の間で創造された芸術である。そうして、この民衆的祝祭芸術の大きな特色は、関係する民衆のすべてが作り手、すなわち創造者であって、受け手としての「観客を必要としない」ことである。ここに重要な鍵がある。観客や鑑賞者を生み出すことではなく、すべての民衆が作り手となること、すべての民衆が芸術家でもあることである。まさに、宮沢賢治が提案したのはそのことだったのではないだろうか。我々にも現代の黒川能としての「民俗的な祭典」が生み出せるはずである。

真壁の人生上の出発は、しかし、学びと表現への欲求を持った者に共通の桎梏があった。学びと表現に対する父のあからさ

まな反対、すなわち「百姓仕事に一人前でなければ詩など書くな」に代表される、「家」とともに、「村」という「湿った暗い風土」が身体と精神を絡めとっていく。

その中で、真壁仁はどのように生活と芸術を一致させてきたか、農作業と詩作の統合をはかって来たかに、著者は我がこととして関心を抱かざるを得なかった。

それは必ずしも順調には実現せず、父の反対や村の風土に逆らって、しかし野の詩人として誠実に詩作に打ち込めば打ち込むほど、時代の潮流に逆らうことになり、ついには転向という手痛い挫折をもたらしてしまう。

さらに、戦後の平和運動の中で真壁仁がとった政治的な態度についても、著者は「真壁には身近な小さな組織やサークルは見えても、状況によってつねに豹変してはばからない、顔の見えない国家権力」や巨大な政治組織、日本の運動組織の脆弱な主体などは見えなかった、と指摘してしる。

そのこととも関連して、真壁が、戦前に満州の開拓地を視察しているにもかかわらず、戦後になっても、その開拓地の実態が見えていないことや、平和運動が世界、特にアジアを視野に入れなければならないにもかかわらず、他者の視点を欠くことも著者は指摘している。

そうした挫折や欠落があったにしても、真壁仁は地域にこだわり、具体的で固有な地域を手放さなかった。

真壁が「地域」を語るようになるのは一九六〇年代から七〇年台だった。それはすなわち、日本の諸地域が「中央」によって「地方化」され、地域固有の力や文化が崩れ出す時期で、高度経済成長期にあたる。「農民が農に自信を失い始めるころ」であった。「真壁がいとおしんだ土は病み、村には人影がなくなり、田畑は荒れ、村の暮らしを支えていた里山の森は荒廃し、手職もまた後継者を失い、一つまた一つと消えていく。」

けれども、住民の自治に着目して地域をとらえなおすこともできる。そうすれば、生活と文化の空間としての地域を、他の地域に対して閉ざすものではく、他の地域との連帯や交流によって自立をたしかなものにすることができる、というビジョンも、また真壁仁は持っていた。

著者が真壁仁にこだわり続けてきたのは、真壁仁が地域に根をもって生きてきた生活者であり農民であったと同時に、孤独な表現者、詩人たらんとし、さらに、地域や世界の抱える社会的課題のいくつかを引き受けて生きようとする実践者、行動者だったからだという。真壁仁も、著者楠原彰も生活者にして表現者、そして行動者であった。

真壁仁は、地域共同体から離脱できず、その中で、楠原彰の場合は都市に出て地域共同体を離脱して、「表現・生活・実践のアポリアを抱えて」生きてきた。「それは決して成功などありえない、生きることの選択であった」というが、はたしてそうか。

確かに、排他的な共同体を離脱して「孤独な表現者、詩人」たらんとしてきたのかも知れないが、ここまで相互扶助の共同体が解体し、その隙間を経済、科学、政治が手を携えて、我々に任せておけば世界は安泰とばかりに簒奪を企てている時代に、「孤独な表現者、詩人」ではあまりに無力ではないか。

真壁仁から楠原彰に至る時代の「全人的人格の表現者」たちの生き方に、もしつけ加えるべきことがあるとしたら、「孤独な表現者」などという位置にとどまらず、黒川能のようにすべての民衆が表現者たることをめざした宮沢賢治に倣って、創造的コミュニティを再生し、その中でもっと陽気な祝祭を楽しむ時間を持つべきだったのではないか、ということだけである。

（A5判、四一六頁、現代企画室、二〇二〇年六月発行、定価二八〇〇円＋税）